

# 地塩

No.414 2019. 3. 24

## 目次

発行日 2019. 3. 24  
 創刊 1926. 9. 10  
 編集 蕃山町教会執事会  
 発行人  
 印刷人 山陽印刷(株)  
 発行所  
 岡山市北区蕃山町2-15  
 日本基督教団蕃山町教会  
 TEL = (086)224-1322  
 FAX = (086)224-1329  
 三井住友銀行岡山支店  
 口座 普通 0962358

## 礼拝説教 2018. 2. 10

### 「招きと選び」

マタイによる福音書二二章一〜一四節

牧師服部 修

できる人にとっては簡単なことでも、できない人にとってはハードルが高い、ということはしばしばあります。先日の婦人会のときにも、「簡単に作れますよ。これをするだけですから」といった会話がありました。そうは言ってもその「だけ」が普段しない人にとっては難しんですよね、といった話の流れで、信仰もイエスさまを信じる「だけ」なのに、その「だけ」が難しんですよね、という会話をしたばかりです。信仰は、確かにイエスさまを信じるだけのことで、罪から救われるためには、イエスさまを信じ、洗礼を受けるだけ、で十分なのです。

今日の箇所には、「婚宴に出席するだけ」の簡単なことが、大きな話にまで広がるたとえ話がイエスさまによって語られています。そして二節に語られているように、このたとえ話は「天の国」がどのようなものであるかを示すたとえ話でもあります。

ここで私たちがまず心に留めるべきことは、イエスさまが天の国を婚宴にたとえられたことにあります。と言いますのも、当時婚宴と言えば、最も楽しく、最も喜ばしい出来事だと理解されておりました。だからその当時知られている中で最も嬉しいものの代表とも言える婚宴を天の国と結び合わせた

ことは、「天国が一番楽しいところ」ということを伝えるためにはうってつけのたとえだったわけですね。

さらにこのたとえ話を読み進めて気が付かされるのは、招待された者たちは、「出席するだけ」で良かったという事です。主人から遣わされた家来たちの言葉の中にそのことが示されています。すなわち「食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、

すっかり用意ができています。さあ、婚宴においでください」と。牛や肥えた家畜を屠るのは、最上級のおもてなしです。岡山でしたら、千屋牛を用意して待っています、といったようなところでしょうか。ともあれ、主人は「すっかり用意ができています」と伝えます。招待された客は、出席するだけです。何も持つていく必要はありません。主人も何か持つてくるように要求は全くしていません。出かけて行くだけの簡単なことです。それなのに、五節、六節では招待された客の余りにも身勝手な態度が描かれます。

信じるだけ。そのことがとても簡単なことであるはずなのに、どれほど難しいものであるのかを思われます。このたとえ話において暗に批判されている祭司長たちやファリサイ派の人々は、大雑把な言い方をすれば、救いは

信じるだけではなく、律法を正しく、忠実に行うことにある、と考えていた人々でした。だから救われるためにはこれだけのことをしなければならぬ、と思っていたし、それをしなさい、と言われたら、それを熱心に守り行う意思を持っていましたし、実際に可能な限り行っていた人々たちでもありましたから、「信じるだけ」と言われると、彼らの感覚からすると、嘘っぽく感じてしまった。けれどもその感覚は、祭司長たちだけではなく私たちも持っている感覚だと言えます。つまり「信じるだけです」と言われるよりも、「これだけのことをしなければなりませんよ」と言われる方が安心できてしまうことがある。ですが、イエス

さまが語られたように、天の国は、すっかり用意された喜びの場に出席するだけの事です。それは、イスラエルの人々に対してだけではなく、イエスさまを信じるだけです、という言葉とともに、すべての人に対して言葉であることを、このたとえ話の続きが明らかにします。

七節に語られる裁きは、イスラエルの罪、また人間の罪を神さまは見逃さない、ということを示します。だから罪を罪とする言葉は厳しい言葉ではありませんが、罪を罪とするお方だからこそ、そのお方が語られる罪の赦しが恵み深いものになるのです。罪を放置するお方の罪の赦しではない、ということとをこの厳しい言葉から受け止めることができます。

このたとえ話の中で、最初に招待された者たちが誰も来なかったのが、王

は家来にこう命じます。「町の大通りに出て、見かけたものはだれでも婚宴に連れて来なさい」と。

「だれでも連れて来なさい」。王のこの言葉は、天の国はだれにでも開かれてあることを示します。婚宴に来るのにふさわしい人を選んで連れて来なさい、ではありません。またこの言葉は、天の国は、自ら行こうと思つて行く場所であるよりも、招かれるものであることを示しています。

つまり、あなたが天の国に行きたいと思つているかどうか、ということよりも、王である神さまがあなたを天の国に招きたいと願つてくださったということが大前提なのです。それゆえに、集まった者たちについて聖書は「善人も悪人も」と記すのです。

天の国は、そしてあえて言えば教会は、善人だけが集まる場所ではありません。ですがそれは見方を変えれば、「私がここにいるのはふさわしくない」と言わなくても良いし、言う必要がない、ということでもあります。はたしてこんな私が教会にいて良いのだろうか、といった不安な思いに対して、イエスさまは「善人も悪人も」という言葉で、何も問題がないことを明らかにしてくださったのです。あなたはこのにいて良い、私があなたを招いたのだから。これが王である神さまの私たちに對する呼びかけです。

ところがこのたとえ話は不思議な展開となります。それは集まった客を見た一二節以下の王の言葉です。  
あなたはここにいて良い。これが本

来の王のメッセージだったはずですが、ならば、礼服を着ていなかったとしても、善人も悪人もいるのだから良いではないか。礼服を着ている人にも着ていない人にも、「良く招きに応えてくれた。あなたが来てくれてうれしい」という王の言葉が記される方が、よほど信じるだけの恵みだとか、王の愛の深さを示すたとえにもなるのに、とも思います。なぜイエスさまはこのくだりを語つたのでしょうか。

礼服を着ることの意味についてはいくつかの説があります。その中でこういう解説に出会いました。それは当時婚宴が開かれるときには、礼服は招待した主人が準備した、というものです。私たちの感覚からすれば、たんすの中に礼服は一着ぐらい、と思います。そう考えると、主人が招待客に、「これを着ておいでください」と届けたことは十分考えられます。

この説に従えば、礼服は招待されたことへの応答ですし、招きに対する感謝のしるしです。しかも応答の礼服も自分で用意するのではなく、届けられたものです。礼服を準備できません。そしてそれは、王はそこまでして私たちを天の国に招待してくださる神さまなのだ、ということでもあります。ここに、天の国への招きと、これを着ていらつしやい、と言われて差し出された「洗礼」という礼服の恵みがあることを思われるのです。だからこそ、婚宴の場で届けられた礼服を着ていな

い者、すなわち、天の国において、恵みとして差し出された洗礼という礼服を着ていない者について、王は厳しい言葉を投げかけたのです。

この厳しさは、先の七節につながる厳しさです。ですが、この王がどれほど心を砕いて招待をしてくださったのかを理解すれば、当然の怒りと言えます。さらに言えば、私たちはこのたとえを語られたイエスさまが、ご自身の十字架においてこの厳しい滅びを引き受けてくださったことを知らされていのです。それゆえにますます私たちは、恐れることなく、安心して、信じるだけで良い、という恵みを受け入れることができるし、信じて、罪を赦され、神さまに受け入れられた者は、婚宴の喜びに生きることが出来ます。あるいは婚宴の出席に向けて、心弾ませて生きることが出来る。この意味で「礼服」がクリスチャンとしての生き方を指す、という解説が成りたつのです。

そうであるならば、最後の一四節の言葉は、私たちにとって心配を呼び起こす言葉ではなく、反対に、あなたこそ招きたい、という愛の呼びかけとして聞けます。そしてイエスさまを信じて生きるとき、私たちは平和のうち

に生きる者となるのです。  
さて、主は今も告げています。「すっかり用意ができています。礼服はあなたのところに届けました。それを着てここに来なさい。」この招きを受け入れ、私たちは婚宴に招かれた喜び、婚宴に向かう楽しみ、婚宴に集う喜びに満たされて歩む者でありたいのです。